

第3回 金次郎像からのメッセージ

小学校の校庭などにいる薪を背負って本を読む少年像をご存知ですか？名は「二宮金次郎」。わたしは彼から、七代目の子孫にあたります。

あの像をみて「勉強が大事！」と言われている気分になる方は多いようです。働いてまで勉強するなんて大変だぁ・・と感じゆううつになる方もあるとか（笑）。つまり、学校に置いてあったこととも関係してか、ふつうは手に持っている「本」に注目が集まるわけです。

しかしわたしは、小さな頃、一緒に住んでいた祖母（金次郎から五代目の子孫）に言われました。あの像で大切なのは「足」だと。あの足が、小さく一歩前に出ていることが大事だと伝えられてきたのです。大きな目標がなくても、カッコイイ夢がみつからなくてもいい、それでも、自分の足元の、目の前の、小さな「一歩」を重ねなさい・・と。あきらめない、くじけない「一歩」を前へと踏み出してゆくことは、何よりも尊く価値のあることだと。

また、あの姿は一見「模範生」をイメージさせるかもしれないけれど、それも違くと祖母は言いました。かならずしも農民に勉強する必要があったわけではない時代、農家に生まれた金次郎が必死に学問する姿も、幼くして両親を亡くしながら愚痴も言わず悲嘆にもくられず懸命に働く姿も、周囲には「気味悪いもの」と映ったそうです。「優等生」どころか、むしろ「ヘンな子」「風変わりな子」というのが金次郎への目でした。でも、彼はあの姿を貫きました。つまりあれは、「ひとになんと言われようと、周囲にどう思われようと、自分にとって大事なことを貫きなさい」という意味だと言うのです。

家族たちが受け取ってきたそんなメッセージ、みなさんはいかが感じられるでしょうか？実は、このあたりと絡んで、わたしが家族から受けてきた教育もあるわけですが、これについては次回、詳しくお話してみたいと思います。